

## 市民研究部会メンバーからのメッセージ

市民研究部会から声をあげていく くぼ たかし  
久保 敬

2021年6月27日のスタートアップセミナー「子ども、保護者も、先生も、タイヘン!! 知ってほしい 大阪の学校現場の『いま』」で、現職の小学校長としてお話をさせていただきました。5月17日、ぼくが松井大阪市長、山本教育長に送った「提言書」が、メディアで取りあげられ、大きな注目を集めたことで、市民研究部会の立ちあげの講演を依頼されたと思われる方もおられるのではと思いますが、実は違うのです。この部会を立ちあげた渡邊充佳さんとは、古くからの知り合いで、1月ぐらいには、新しい部会を発足させるので、ぜひ、現職の生の声で学校現場の状況を語ってほしいと依頼を受けていたのです。喜んでお引き受けしましたが、渡邊さんがどのような思いでこの部会を立ちあげようとしているのか詳しいことをお聞きしませんでした。



コロナ禍の中、いわゆる「大阪都構想」に対する2回目の住民投票が実施されたことから、渡邊さんが、「大切にしたいこと」「おかしいと思うこと」「ゆずれないこと」に対して意思表示し、「未来の子どもたちにどんな社会を手渡していくのか」を語り合い、できることから行動に移さなければならないだという決意のもと、この部会を立ちあげられたことが、発足に込めた思いを読んでわかりました。

ぼくが松井市長に「提言書」を送った思いは、まさに渡邊さんと同じでした。講演の依頼をお引き受けした時点で、「提言書」を出すことが運命づけられていたのかもしれませんが。

教育が政治介入によって独立性を失っていることを感じながら、今は辛抱の時、時代が変わればなどと思いつき、おかしいことをおかしいと言えない自分への怒りが、「提言書」でした。この3月末で定年退職し、学校現場を離れましたが、これからも自分自身に正直に声をあげ続けるとともに、「市民提言(仮)」づくりの同志として活動できればと思っています。

### 2021年度の市民研究部会を振り返って

「生活者として」の視点を大切にしたい たなか ふみこ  
田中 文子

渡邊さんの「巻頭言」にある「生活者として」という言葉を大事にしたいと強く思います。

日々、ここで暮らしている者が感じていること・考えていることを発信し交流することの大切さ。日々の暮らしを流していくこと自体が大変で、政治は政治家任せになりがちな「わたし」。政治家を信頼などできないが、「どうして?」「アカンやろ」という自分の声をどうしたら活かせるのか見えず押し殺してしまう。



ロシアのウクライナへの軍事攻撃のニュースを見て考えたことは、政治のワンマン体制をつくってはいけない、カリスマ政治家をつくってはいけないということです。ここまで来てしまうと、おかしいと思っても誰も阻止できない。ワンマンのために、どれだけの血と涙が流されなければならないのか、また繰り返してしまった。日頃から、政治・政策に関して「なぜ?」「ノー」と言える状況をつくるのが大切だなと思ったのです。市民研究部会の活動を大事にしたいと思います。

活動は、久保敬さんの問題提起でスタートしました。久保さんの行動には大きな勇気をいただきました。大阪市からの攻撃が続く学校の中からの問題提起。ここにつながり、その輪を拡げるとともに、どのように続けていくのか考えたいと思いました。

そして、山下耕平さんからの問題提起。学校に行かないという地平から見てきたことは、現代社会の矛盾を超えていくために考えなければならない普遍的な課題でした。

学校関係者か「不登校」関係者か、ということではなく、いろんな場、いろんな役割を担って生きる「生活者として」の「わたし」を大切に集い、意見交換したいと思います。

やってきて、やり残して、やり直して、やっていく

にしえ たかのり  
西江 尊徳

2020年11月のある日。「大阪の子ども施策について、子どもの人権の視点から検証する研究部会を立ち上げたいので、加わってもらえないか」と渡邊さんからのオファー。「政策に詳しいアカデミックな研究者の方々がたくさんおられると思いますが、ズブの素人の僕なんかでいいんでしょうか?」と返信しつつ、またちょっとした期待感もありつつ、翌日にはこの研究部会の一員に。



気づけばもう10年も前のこと。2012年3月、「CORE+」(コアプラス)・武田緑さんと一緒に『大阪の教育★ガチ熟議』という100人規模のイベントを企画したことがあった。大阪維新の会も含む議員、教育・保育関係者、保護者、研究者、学生、NPO関係者、一般の会社員、落語家、…など実に多様な立場の参加者がまさにガチで熱いグループワークを展開した。当時は、「大阪府教育基本条例案」が議会で成立に向かうなど、政治が教育行政に関与を強めていた頃。対立や断絶の構図が色濃くなる中、一方で2009年からの民主党政権で‘熟議’というフレーズが謳われてきた流れもあり、異なる他者が直接じっくり対話することの可能性の模索が続いていた時期でもあった。

あれから随分、時は流れ、さまざまな施策がなされた。これまで見つめてきた大阪の教育を振り返り、子どもの権利という視点で現在の状況を見つめ直し、これからの子ども施策を展望していく。今回参加した市民研究部会が僕にとってそんな節目にできれば、と。また、このところすっかり乏しくなってしまった、意見が異なる他者との対話の機会も持ちながら、大阪の子ども施策を考える環(わ)を拡げていければ、と。2年間の研究部会が終わる頃、どんな足跡が残って、何が浮かび上がってくるか、僕自身楽しみにしている。

渡邊さんの研究部会の発足に込めた思いが胸に刺さります。私は市民として、「考え、発言し、対話し、行動して、つくっていこう」と生きているだろうか。どこか、避けてるのではないか。考え、発言し、対話する言葉を持っていないことに対する劣等感とあきらめ、うまく話せず、自分でも話しているうちにわけがわからなくなる。後であ～あの時は、あ～言いたかったのではなかったと後悔の連続。そして、私が言っても変わらないと、結局の最悪な思考停止。不勉強の道まっしぐら。こんな心情に陥ることこそが権力者の思う壺。



それでも、子どもの時から事あるごとに感じてきた「!?', 「なんかおかしい」、「それはいやだ」が身体感覚としてある私。市民研究部会の存在は、私にとって刺さるのですが、人であること、市民であることを呼び覚ましてくれるものでした。

先日、『69 歳』という韓国映画を観ました。性的暴行を受けた高齢女性の孤独な闘いを描いたものです。最後のシーンは、自分で書いた告訴状を何枚も何枚もコピーして、ビルの屋上から風に任せて撒きます。その時、『白バラの祈り ゴフィー・ショル、最期の日々』というドイツ映画の最初のシーンを思い出しました。第二次世界大戦中のナチスに対する抵抗運動家、白バラのメンバーの一人である 21 歳のゴフィー・ショル。彼女が大学構内でピラを撒きます。上階から風とともにそのピラが舞います。

人は風に舞うピラをどんな思いで書き、届けたいと思うのか。その思いの重さを思います。その重いピラが軽々と風で舞っていくのです。受けとめる人がいることを信じてでしょうか。私も自分でピラを書いていく、そんな生き方をしたいと思います。まずは、「考え、発言し、対話し」を。

市民研究部会では、活動の趣旨に賛同し、一緒に活動して下さる方を随時募集しています。

子ども情報研究センター正会員の方は、部会のコアメンバーとして、セミナー等の企画立案・運営の段階から関わっていただくことができます。

センター非会員の方も、公開セミナーへの参加にとどまらず、事前のお申し出があればミーティングへのオブザーバー参加もしていただくことができます。

ご関心をお寄せくださる方は、まずはお気軽に下記までご一報ください。

【お問い合わせ】

- 子ども情報研究センター事務局 宛

E-mail : info@kojoken.jp

- 部会長 渡邊 充佳 宛

E-mail : fatalist198389@yahoo.co.jp